

「衣生活」からみた住み方に関する研究
 (第1報 住空間における「衣生活」の動向)

奈良女大家政 ○余財章子 今井範子 中村久美

目的：本研究は、衣服の着替えに関する生活様式-更衣様式に着目、衣生活の面から住空間のあり方を考える目的で行ってきた、一連の調査研究^{*}に続くものである。浴室が公室側に位置する平面を持つ一般住宅^{*}に対し、本研究では浴室が私室側に位置する（「欧米的」平面を持つ）住宅をとりあげた。浴室が私室側に移ることで、平面的にはより公-私の区別が明確になる住宅において、衣生活からみた公私領域の実態と更衣様式を明らかにすることにより、今後の住宅計画のあり方に資することが目的である。第1報は「衣生活」そのものの動向を、住空間と関係づけながら明らかにする。

方法：浴室が寝室近くにある住宅（兵庫、大阪に立地する公社、民間の戸建分譲および低層集合住宅）を選定、主婦を対象とした質問紙調査を実施した。有効サンプル数227。このうち主寝室を供給平面の意図通り浴室階に設定している190を、分析の対象とした。

結果：日常着は「外出着」「生活着」「家庭着」「部屋着」のうち3～4種を所有、着分けしている。就寝着は「ねまき」のほか、「ねまき兼用部屋着」の着用が若い世代に多い。起床時、一般住宅^{*}に比べて洗面後に着替える者が多く、その際ガウンの着用もみられるが、ねまきのまま朝食をとるものが少なくない。帰宅後は特に主人、子供で「部屋着」「ねまき兼用部屋着」に着替えている。入浴後はその時間帯に関わらず、「ねまき」に着替える傾向である。①「部屋着」の普及、②「ねまき」「ねまき兼用部屋着」など、非常にくつろいだ恰好でいること、
 以上のような傾向が指摘できる。

^{*}衣生活からみた住宅計画に関する研究-更衣様式の検討-

その1～2（独立住宅の場合）1992年建築学会近畿支部

その3～4（集合住宅の場合）1992年建築学会大会